

「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法に関する研究

～ポートフォリオ評価の長期的な活用を通して～

山口市立大殿小学校

教諭 内山 公介

I. はじめに

本稿は、「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法について、実践事例を含めて紹介することを目的とする。2019年に改訂された指導要録においては、「関心・意欲・態度」に代わって「主体的に学習に取り組む態度」が観点の1つにされた。しかし、「知識・技能」や「思考・判断・表現」に比べ、「主体的に学習に取り組む態度」は、何をどのように評価すればよいのかがわかりにくく、学校現場でも評価について悩みを聞くことが多い。そこで本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価は何を評価するのかを政策文書を概観することで確認し（第II節）、どのような方法で評価するのかを国語科を事例として提案する（第III節）。また、「主体的に学習に取り組む態度」を育成するための方法として、ポートフォリオの活用について述べる（第IV節）。

II. 「主体的に学習に取り組む態度」は何を評価するのか

まず、「主体的に学習に取り組む態度」は何を評価するのか、あるいは評価してはいけないのかについて、基本的な考え方を確認したい。その際、以下の2つの文書を参考にする。1つは、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(2019年1月。以下、「報告」)、もう1つは、国立教育政策研究所教育課程センター「学習評価の在り方ハンドブック」(2019年6月。以下、「ハンドブック」)である。なお、「ハンドブック」は「報告」の要点をまとめたものである。

(1) 何を評価してはいけないのか

「ハンドブック」によると、「学びに向かう力、人間性等」は「主体的に学習に取り組む態度」として観点別評価を通じて見取ることができる部分と、「感性、思いやりなど」の観点別学習状況の評価や評定になじまないため、評価の対象にならない部分があるとされる。図1に示すように「主体的に学習に取り組む態度」が評定の対象になる一方で、「感性、思いやりなど」は「個人内評価」を行うべきとされている。また、これまでの情意領域における評価について「挙手の回数や毎時間ノートを取っているかなど、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていない」ことが課題とされており、いわゆる授業態度を評価するわけではないことも確認されている。

(2) 何を評価するのか

では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価はどのような側面に着目すればよいのだろうか。「ハンドブック」では、2つの面から評価することが提案されている。1つは、「①知識及び技能を獲得した

り、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組を行おうとする側面」、もう1つは、「②①の粘り強い取組を行う中で、自らの学習を調整しようとする側面」である（図2）。そして、①②の姿は「教科等の学びの中では別々ではなく相互に関わり合いながら立ち現れるもの」とされ、図2に示されるように、2つの側面を関連させて評価することが提案されている。

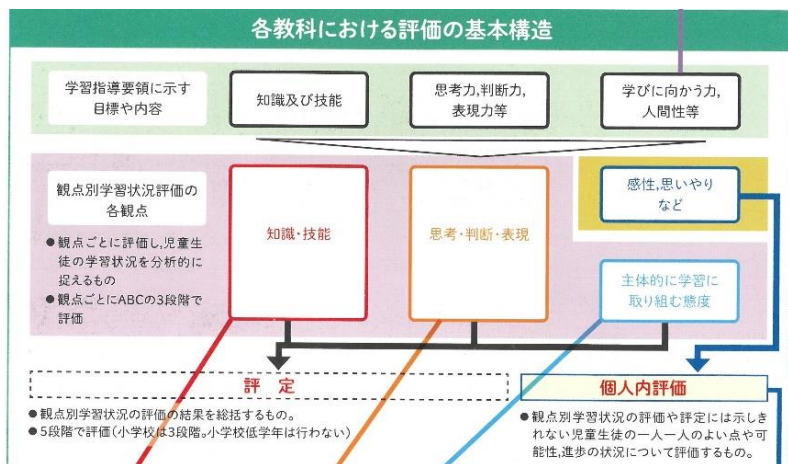


図1 各教科における評価の基本構造

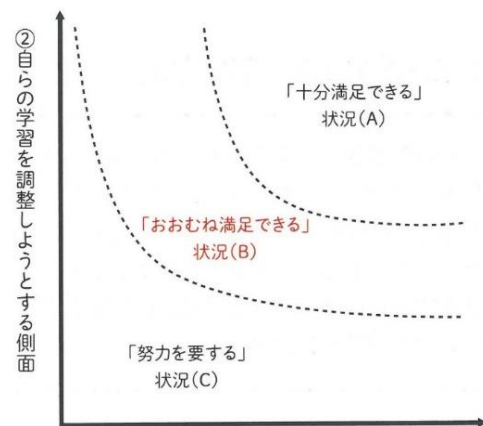


図2 評価のイメージ

(3) 国語科における「主体的に学習に取り組む態度」を評価する際のキーワード

では、それぞれの教科において、具体的にどのような点を評価するとよいのだろうか。ここでは『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料【小学校 国語】』（2020年3月。以下、「参考資料」）における、「内容のまとめりごとの評価規準（例）」を参考にしてみたい。「参考資料」には、評価規準の例がいくつか挙げられているため、これらの記述を参考にすることで、評価のポイントの手がかりをつかむことができるだろう。なお、本稿で示す実践事例との関係から、ここでは「C 読むこと 第5学年及び第6学年」を対象とする。

表1 「内容のまとめりごとの評価規準（例）」

ア	粘り強く、論の進め方について考え、学習の見通しをもって分かったことや考えたことを文章にまとめようとしている。
上記以外の例	進んで、日常的に読書に親しみ、今までの学習を生かして分かったことや考えたことを話し合おうとしている。
イ	進んで、物語の全体像を具体的に想像し、学習の見通しをもって考えたことを文章にまとめようとしている。
上記以外の例	積極的に、原因と結果など情報と情報との関係について理解し、学習課題に沿って内容を説明しようとしている。
ウ	進んで、文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、学習課題に沿って考えたことを報告しようとしている。
上記以外の例	積極的に、文章の種類とその特徴について理解し、今までの学習を生かして、調べたことを報告しようとしている。

表1の中で繰り返し出てくる言葉に着目してみよう。すると、「進んで」「積極的に」「学習の見通しをもって」「学習課題に沿って」「今までの学習を生かして」が複数回使われていることがわかり、これらが評価の際のキーワードとなることが示唆される。さらに、「ハンドブック」で示された内容を踏まえると「粘り強く」もキーワードになるだろう。「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、以上のような点に着目して評価することが有効だと考えられる。

Ⅲ. 「主体的に学習に取り組む態度」はどのように評価するのか

「ハンドブック」や「参考資料」から「主体的に学習に取り組む態度」においてどのような側面に着目して評価するとよいか明らかになってきた。では、具体的にどのような評価方法で評価をすればよいのだろうか。また、評価基準はどのように設定できるだろうか。ここでは、第6学年の「読むこと」における実践事例を2つ示す。表2は、教材名、「主体的に学習に取り組む態度」に関する目標、評価方法、評価基準（B）をまとめて示したものである（評価はA～Cの3段階で行っている。また、以下では説明的文章を扱った事例を「事例1」、文学的文章を扱った事例を「事例2」とする）。なお、事例1では「『これからの社会でどう生きていくか』ということについて、筆者（池上さん、鴻上さん、石戸さん）の考えを示しながら、自分の意見をまとめよう」を、事例2では「物語が自分にもっとも強く語りかけてきたことをまとめ、伝え合おう」をパフォーマンス課題として設定した。いずれのパフォーマンス課題も、学習への粘り強さを発揮したり自己調整したりする機会が保障されるように、単元の導入・中間・終末の3回同じ課題を与え、記述を修正する機会をもてるようにした。

表2 実践事例の概要

教材名	「主体的に学習に取り組む態度」に関する目標	評価方法	評価基準(B)
メディアと人間社会 大切な人と深くつながるために プログラミングで未来を創る (事例1)	筆者の考えを引用したり、友だちと交流したりしながら、学習課題に対する自分の考えを粘り強くまとめようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題 単元末におけるふり返りの記述 毎時間後のノートのふり返りの記述 授業時の観察 	自分の考えを伝えるために、今までの学習や友だち、教師の意見を進んで生かし、意図的で適切な修正をしながら自分の考えをまとめようとしている。
海の命 (事例2)	学習課題について進んで話し合い、積極的に友だちの考えを取り入れながら、物語が自分に語りかけてきたことを文章にまとめようとしている。	<ul style="list-style-type: none"> パフォーマンス課題 毎時間後のノートのめあてとふり返りの記述 授業時の観察 	教師の支援がほとんどなくても時間いっぱいグループで課題について話し合うなど、友だちの考えを取り入れながら、進んで物語が自分に語りかけてきたことを文章にまとめようとしている。

事例1における評価基準Bの児童は、単元末におけるふり返りの記述で「ぼくは、今回は先生や友達にアドバイスされたことをいかして今回は書いてみました。前の文章は始め・中・終わりをわけて書いていなかったの今回は始め、中、終わりに気をつけて書きました。友達の意見を取り入れて書くことが出来た」としていた。実際の文章を見ると、段落を3つにわけ、自分の主張と具体的な事実を段落ごとにわけて記述しようとする姿が見られた。既習事項や友だちの意見を進んで生かしながら自分の考えをまとめていることから評価をBとした。

また、B基準のような意図的で適切な修正が複数見られたものをAとした。たとえば、評価基準Aの児童は、「文章に親近感をもたせるため、SNSの事例を加えた。また、事例は時やきぼ、場合などがことなる2つをそろえ、まとめで2つを比べ池上さん（「メディアと人間社会」の筆者）の言っていたこ

とも加えてまとめ、説得力をあげた。構成では、はじめ・中・終わりと2つの事例は池上さんと同じように時代順に並べた」と記述していた。実際に記述した文章を見ても、事例の選択や提示の順序を意図的に行ったり、筆者の考えを踏まえながら自分の考えを形成したりしていることがうかがえた。なお、B基準に満たないものをCとした。

事例2における評価基準Bの児童は、グループで自分の考えを伝え合ったり、友だちの考えに質問したりすることを教師の支援をほとんど必要とせずに行うことができていた。また、ふり返りに「〇〇さんの意見を参考にして読みを深めた」のように、どのようにして自分が読みを深めたのかを自覚している様子が見られた。

B基準に加えて、教師の支援がまったくなくても時間いっぱい課題について話すことができるなど話合いに進んで取り組んでおり、その内容も充実していた児童や、自分の読みがどのようにして広がったり深まったりしたのかを、「友だちの意見と似ているか、違うかを意識した」や「物語の山場に着目した」というように、具体的に自覚している児童をAとした。なお、B基準に満たないものをCとした。

2つの実践を通して、評定Aの児童は、どのようにすれば自分がよりよい考えを形成できるか、より読みを深められるかについて具体的に把握できていることが特徴として見られた。言い換えると、彼らのメタ認知能力の高さがうかがえた。このメタ認知が適切な学習の調整につながり、さらに適切な調整がされることで学習の成果や意欲が高まり、粘り強さを生み出していると考えられた。

IV. 「主体的に学習に取り組む態度」はどのように育成するのか

「主体的に学習に取り組む態度」の育成においてメタ認知が重要であると考えられた。メタ認知を育むうえで有効だと思われるのが「ポートフォリオ検討会」である。「ポートフォリオ検討会」とは、学習の実態について学習者と教師や友だちの間でポートフォリオをもとに検討するものである。「ポートフォリオ検討会」を行う過程で、学習の実態を他者に説明したり、話し合ったりすることでメタ認知が促される。そのため、定期的に「ポートフォリオ検討会」を繰り返すことで、児童のメタ認知が育まれると考えられる。本実践でも、ポートフォリオとして保管していた事例1・2で用いたワークシートや取り組んだパフォーマンス課題などを参考にしながら、学習の成果を確認したり、中学校に向けて課題を把握したりする時間を設けた。「ポートフォリオ検討会」を行うことで、友だちがどのような方法で学びを深めているのかを知ることができたり、児童も教師もより長期的な視点から学習の成果や課題を確かめたりすることができた。

V. まとめと今後の課題

本稿では、「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、「何を評価するのか」を政策文書の概観を通して把握した。また、「どのように評価するのか」について、評価方法や評価基準の事例を提示した。さらに、「主体的に学習に取り組む態度」には、メタ認知が深く関わっていることを指摘し、その育成には「ポートフォリオ検討会」が効果的であるとした。今後は、「主体的に学習に取り組む態度」についてのルーブリックを作成し、同僚教師など他の教職員とも評価基準を共有していくこと、また、事例を積み重ねることで評価の信頼性・妥当性を高めていくことが課題である。また、「主体的に学習に取り組む態度」やメタ認知の育成をどのように進めていくかについてもさらに詳細に検討したい。